



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

保育実践と統合的に編み上げられる造形活動の実践  
理論の構築：

生活に根ざして展開する探究的な保育実践と造形活  
動の統合化（2年次）

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2021-07-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 神山, 雅美, 八木, 亜弥子, 阿部, かほり, 笠原, 広一,<br>清野, 泰行<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2309/00173419">http://hdl.handle.net/2309/00173419</a>   |

# 保育実践と統合的に編み上げられる造形活動の実践理論の構築

— 生活に根ざして展開する探究的な保育実践と造形活動の統合化（2年次） —

神山 雅美（附属幼稚園竹早園舎） 八木亜弥子（附属幼稚園竹早園舎） 阿部かほり（附属幼稚園竹早園舎）  
笠原 広一（大学美術・書道講座） 清野 泰行（大学美術・書道講座）

## 目 次

|  |    |
|--|----|
| 1. はじめに  | 2  |
| 1. 1. 研究の目的  | 2  |
| 1. 2. 今年度の取り組み                                     | 2  |
| 2. コロナ禍での造形活動                                      | 3  |
| 2. 1. 化石プロジェクト, その後「未来の自分へ—お気に入りの石を瓶に詰めよう—」        | 3  |
| 2. 2. コロナ禍での実践                                     | 4  |
| 2. 2. 1. 休園期間の家庭での造形活動                             | 5  |
| 実践① 園での経験を家庭に～はさみの経験「りんごと青虫くん」とクレヨンの経験「かたつむりのお散歩」～ | 5  |
| 実践② 楽しさがつながっていく郵送教材の工夫                             | 5  |
| 実践③ オンラインを活用して～お話と造形活動とをつなげて～                      | 6  |
| 2. 2. 2. 保育再開後の造形活動                                | 7  |
| 実践④ 心の解放～フィンガーペインティング～                             | 7  |
| 2. 2. 3. コロナ禍の竹早祭                                  | 8  |
| 実践⑤ 4歳児はな組「ドングリ坂のドングリ」                             | 8  |
| 実践⑥ 5歳児つき組「あおいそらをえがこう」                             | 9  |
| 実践⑦ 保護者も参加「みんなで作ろう ワンダーツリー」                        | 9  |
| 2. 2. 4. コロナ禍の園生活の中でも「作ったり, 描いたりしながら」遊ぶ子ども達        | 10 |
| 3. リモートでの大学と幼稚園の共同                                 | 10 |
| 4. ここまでの取り組みの振り返り                                  | 11 |
| 4. 1. 大学教員からの振り返り                                  | 11 |
| 4. 2. 幼稚園教員からの振り返り                                 | 11 |
| 5. 今後の課題と可能性                                       | 11 |

# 保育実践と統合的に編み上げられる造形活動の実践理論の構築

## — 生活に根ざして展開する探究的な保育実践と造形活動の統合化（2年次） —

神山 雅美（附属幼稚園竹早園舎） 八木亜弥子（附属幼稚園竹早園舎） 阿部かほり（附属幼稚園竹早園舎）  
笠原 広一（大学美術・書道講座） 清野 泰行（大学美術・書道講座）

### 1. はじめに

本研究は、附属学校である竹早園舎の実践を基に、保育実践と統合的に編み上げられる造形活動の実践理論の構築を目指すものである。大学においては、本研究の知見を基に、学部では「初等図画工作科教育法」（理論）「図画工作科研究」（実技）、教職大学院では幼小連携を視野に入れた指導内容が整備され、附属と大学が連携した教員養成プログラムが加速することをねらうものである。附属幼稚園竹早園舎では、幼稚園教育要領の改訂を踏まえた竹早地区幼小接続カリキュラム表現領域の改訂及び指導法の確立が実現し、造形活動における表現を主軸とした保育内容の充実を目指している。

前回の報告<sup>1)</sup>では、次の二点が明らかになった。第一に、平成28～30年度の実践を基に本園舎の教育課程及び指導計画から抽出した表現に関わる内容に照らし、新たに「造形活動」に関する指導計画を提案した。第二に、5歳児学年の生活の流れにそって展開された実践を整理分析し、技能面の育ちについて明らかにする中で技能及び表現技法等の経験のつながりが意識された上、単なる技能獲得を目指した指導計画ではなく園生活のつながり、体験の関連性を意識することが可能となった。二年次での研究では、「生活に根ざす」ことをどう指導計画に表していくか、が課題となった。このことは、専門的な知見をもった大学教員及び学生との共同で、幼稚園教員だけでは実現出来ない造形的（表現的）な技能の育ちと単なる技能面の育ちだけでない総合的な経験の積み重ねについて、より深く追求された指導計画の再構築が期待されたのである。

しかし、世界的規模での新型コロナウイルス感染症の流行のため、前年度の2月末から全ての学校での教育活動が一変した。大学ではリモートでの授業が基本になり、大学構内への出入りは制限され、附属学校の教育活動に学生が参画する機会も激減した。また、竹早園舎では最初の緊急事態宣言が解除される6月までは休園となり、幼稚園再開後も分散登園が続いた。2学期はようやく平時に近い保育が展開できるようになりつつあったが、第3波の流行のため再び保育活動が制限されるようになり、現在に至ってもコロナ感染対策を最優先にしながら、どのように子ども達の育ちを保障した教育活動が展開できるか日々模索が続いている。そこで、保育活動に制限がある中での実践であることから、二年次の研究の目的を実際に即して修正し、コロナ禍での大学教員と幼稚園との共同実践を模索することとした。

#### 1. 1. 研究の目的

当初の計画では「生活に根ざして展開する探究的な保育実践と造形活動の統合化」をサブテーマに二年次の研究を進める予定であったが、この「生活」を「新型コロナウイルス感染症流行下の生活」と置き換え、さらに園生活のみの連続性ではなく「園と家庭との生活の連続性」をも保障する造形活動の実践を目指すこととする。

#### 1. 2. 今年度の取り組み

コロナ禍の状況下でできる取り組みとして、具体的な活動を見直した。

- 休園中の生活と再開後の園生活の繋がりをもたらす造形活動やコロナ禍での豊かな園生活を育む幼児の造形活動を実践する。
- コロナ禍での実践を記録に残し、次年度以降の保育活動の糧とする。
- 大学と幼稚園との共同の実践については、オンラインでの会議、リモートでの実践などの可能性を探る。

## 2. コロナ禍での造形活動

前回の報告では、5歳児学年の実践を中心に1月までの取り組みをまとめた。その後、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が発令され、5歳児学年の子ども達は「化石プロジェクト」のまとめと卒園を未曾有の状況下で迎えた。また、新年度は緊急事態宣言下でスタートしたため、各家庭で生活する子ども達に園での学びをどう保証するかを、試行錯誤しながら実践した。現在も様々な対策を行う中でも、通常の保育が難しい状況は続いている。しかし、コロナ禍で行った実践は貴重な記録となり、今後の保育や造形活動になんらかの示唆をもたらすものとする。一年に渡る子ども達の園生活（休園期間も含め）を造形活動の視点から整理する。

### 2. 1. 化石プロジェクト、その後 「未来の自分へお気に入りの石を瓶に詰めよう」

前回の報告内の「化石プロジェクト」<sup>2)</sup>は、コロナ禍で休園になる直前の2月4日、大学との共同での活動につながった。対象は2年間竹早園舎で生活し、4月から同じ敷地内にある附属竹早小学校に進学する子ども達である。幼稚園卒園を控えたこの時期、二年間の園生活を振り返る中で楽しかった遊びを思い出し、園庭で「化石の発掘」の遊びを楽しむことが学級の子ども達の間で広がった。前回の遊びの時は、4歳児学年の時で一部の子ども達の遊びであったが、5歳児学年でのキッズフェスティバルで「化石発掘」のシーンを表現したことから共通のイメージや楽しさになっていたのである。担任教員は、大切そうに石を洗いきみがく姿や、自分のロッカーの引き出しにしまう様子から、この「化石」（宝石に見立てている子もいる）を幼稚園生活の大切な思い出になるように造形活動ができないか大学教員に相談した。

担任教員の活動のイメージは「好きな色を塗る」「瓶につめる」であったが、大学教員から「石を大切に扱うのに、瓶に思い出や思いを込めて封入してはどうか」「大切な思い出なので瓶を素敵に飾ってはどうか」また、「未来の自分宛てに手紙（幼児なので絵でも文字でもいい）を書いて一緒に瓶に入れてはどうか」などのアイデアが出された。綿やラメなどの具体的な材料の提案、導入から展開までの活動の流れの検討など、共同で活動を計画した。

化石プロジェクト 2019 「未来の自分へお気に入りの石を瓶に詰めよう」

【実 施】 2020年2月24日(木) 8:30~10:30(予定)  
 【対 象】 2年保育5歳児つき組(26名)  
 【指導者】 つき担任 神山雅美 / 補助 阿部かほり  
 園舎長 清野泰行  
 大学美術 笠原広一

【わらい 内容】 ○自分たちの遊びのイメージを共有しながら、瓶に詰める過程を楽しむ。  
 ・化石発掘の遊びをする中で、自分の石を見つける。  
 ・自分の石を選び、洗いきみながら瓶に詰め、封をする。  
 ○幼稚園での思い出を自分なりに振り返ると共に、「未来」を想像し期待をもつ。  
 ・石を掘ったり、研究所の遊びをしたり、キッズフェスティバルのことを思い出したりなど、楽しかったことを思い浮かべる。  
 ・「未来の自分へ」の手紙を書いたり、表したいことを描いたりする。  
 ○学級の友達とのつながりを感じる。  
 ・友達の様子を見たり、思ったことを伝え合ったりする。

【準 備】 事前の検討かた ○化石研究所の発掘の遊び場や道具(4歳児学年の遊びで使ったセット：刷毛：プラスチックなど)、たらい、綿いし使っている「はくつちゅう」の看板、ティラノサウルスの爪の化石、宝石の標本、石の図鑑  
 当日の準備 ○絵本の部屋 化石博物館の絵本(読み聞かせ) 導入 清野先生の息子さんの神宮の土(瓶詰め) 化石研究所-未来研究所の看板「はくわしのいし」博物館の看板  
 ・材料 自分で選んだ石、金の墨の瓶、手紙を書く紙(両面折紙、カラー上質紙)、カラーサインペン、図形の綿、ラメ、黒マジック、マスキングテープ

【設定】 絵本の部屋(博物館) 遊戯室(未来研究所)  
 テーブル席に: 手紙の紙、サインペン 綿、ラメ  
 長テーブル2 テーブルクロス(茶) 看板  
 幼児机5台 幼児椅子26脚  
 \*化石発掘道具、研究所博士、マスキングテープ、マジック

【活動の流れ】  
 9:30 活動の流れ、幼児の動き T1: 神山 園舎長: 清野 T2: 阿部、記録: 笠原  
 ○2階保育室に集まる ・化石研究所から未来研究所になることを話し導入 ・前日欠席だった幼児が自分の石、瓶を選ぶのを補助  
 ○絵を貼る ・化石研究所の博士の自己紹介、笠原先生、園舎長先生を紹介  
 ・看板の紹介 ・移動(絵本の部屋で自分の石をもつ)

図1 当日の指導案 (一部抜粋)



図2 お気に入りの石を見せ合う



図3 石と手紙を瓶に詰め、封をする

子ども達は、数日前からの担任教員の活動への誘いに、遊びの中で見付けていた石の中から瓶に入れる石を選んで決めたり、家庭から気に入った瓶を持参したりと気持ちが高まっていった。絵本の部屋に設定されていた「化石研究所」には本物の化石や鉱石も置かれ、「宝石」を探すイメージにもつながっていった。当日、活動の導入として園舎長（大学教員兼任）から瓶に詰めることの意味を話してもらおうと、子ども達の活動への期待が一段と膨らんでいった。瓶に詰めて飾る過程では、選んだ石を見せ合うなど互いに関心を持ち合う姿があり、楽しい気持ちなどを友達と共有することを喜んでいる様子を感じられた。未来の自分へのメッセージを書いた後は、ラメをまぶした柔らかい綿の上に石を据え、マスキングテープで封をした。瓶は“みらいけんきゅうじょ”と看板を変えた絵本の部屋に置かれ、子ども達はみんなの瓶が並んでいる中、互いの瓶や石を見比べたり、「研究所」のイメージを感じて更に石を探しに行ったりしていた。



図4 未来研究所に並べられた瓶

本活動の数日後に緊急事態宣言が発令され、子ども達の園生活は突然中断された。その2週間後、卒園式は規模を縮小し実施することが出来たが、この穏やかな園生活を送っていた時の「未来研究所」での活動は、子ども達が2年間の園での生活を振り返るとともにこれからの生活に期待を抱き卒園していくという思いにつながるものとなった。卒園式後、綺麗にラッピングされた瓶を親子で大切に持ち帰って行った。



図5 活動の導入 思い出の瓶の紹介



図6 手紙に書いたことを伝える

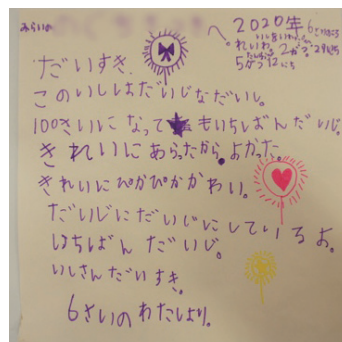
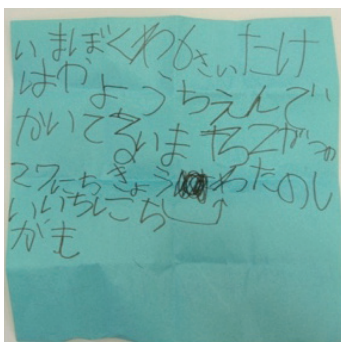


図7・8 未来の自分への手紙



図9 卒園式当日の様子

## 2. 2. コロナ禍での実践

令和2年度は、緊急事態宣言下で休園の中スタートした。5歳児学年の始業式や4歳児学年の入園式も行われないままであった。5歳児学年では、4歳児学年からの学びの連続性や園生活での友達との協同性の育ちを、どう休園明けにつなげて行くかが課題となった。4歳児学年では、まだ一度も登園していない親子に、新しく始まるはずだった幼稚園生活への期待がもてるようにすると共に、家庭でも入園当初の時期に経験する遊びや活動を

楽しみ、入園後の生活が安心してスタート出来るようにすることが課題となった。家庭でも親子で楽しめるように、定期的に郵送で教材を送ったり、オンラインストレージサービスを利用して歌や読み聞かせの動画を配信したりしていった。この取り組みは、6月に幼稚園が再開した後の分散登園期間中も続けた。

## 2. 2. 1. 休園期間の家庭での造形活動

最初に送った教材は、外出もままならない状況下ということで、画用紙、折り紙などの自由に使える材料と各学年に合わせた遊び教材であった。5歳児学年へは幼稚園で楽しんでいたクレープ紙での色水作りの材料、4歳児学年へは塗り絵などである。まずは、家庭で遊ぶことを楽しめるように、という意図からであった。幼稚園教員にとっても初めての経験であり、手探りの中始まった取り組みであった。その後も定期的に歌や絵本の読み聞かせを配信していく中で、次第に再開後の生活を想定し、登園した時にみんなで一緒に楽しむことを期待したり、登園後に園に飾ることで幼稚園や友達に親しみを感じられたりするように、といった願いを込めていった。また、4歳児学年では、園生活の始まりの時期が不確かであったので、入園当初に意図的に経験していくはさみやクレヨンなどの技能面の経験を家庭で楽しみながらできるように教材を考えた。その際、保護者が一緒にやることを想定し、単に技能の経験にならないように遊びながら経験できるようにした。以下は4歳児学年の実践である。

### 実践① 園での経験を家庭に～はさみの経験「りんごと青虫くん」とクレヨンの経験「かたつむりのお散歩」～

4歳児学年の子ども達には、入園後に幼稚園で使う予定の用品も一緒に送った。新しい用具を受け取ることやそれを使ってみることを通し、新しい園での生活に期待をもってほしいという願いも込めた。教材は、入園前の経験が様々であることや個人差がある年齢であることを前提に、誰もが楽しんでできるようにシンプルな遊びとした。また、遊びながら新しいはさみやクレヨンを使い、園生活で実際にやる予定だった活動を家庭でも経験できるようにした。(図10, 11)



図10・11 郵送教材の一例

### 実践② 楽しさがつながっていく 郵送教材の工夫

休園期間の各家庭への電話連絡の際、郵送教材の活用について開くと、自分宛のプレゼントが届いたことを喜んでいたり、早速いろいろなものを作り、それを使って遊んだといった子ども達の様子が分かり、外出もままならない自粛生活の中での造形活動の可能性を感じた。その後郵送する教材は、前回に経験した技能を用いる活動であったり、イメージが繋がったりする題材を選定することを意識し、二週間毎に配信と教材送付を計画的に行っていた。(図12, 13) 保育再開を意識した5月は、家庭で作ったものを幼稚園に持って来ることも伝え、登園を楽しみにできるようにした。(図14, 15)



図12・13 園生活につながることを意識した郵送教材例



図14・15 幼稚園での遊びの様子

実践③ オンラインを活用して～お話と造形活動とをつなげて～

幼稚園の造形活動は、絵本などのイメージを生かした導入から展開することがある。再開後は特に、家庭保育日に絵本や紙芝居の読み聞かせを配信し、お話のイメージの作って楽しめることを意識した。それらは、同じ学級の友達との共通の経験であり、家庭で楽しんだものが次の登園日には園での共通の楽しさになっていくようにしたのである。例えば、紙芝居「ごきげんのわるいコックさん」<sup>3)</sup>では、配信を受けてお話の中に出て来るクルクルキャンデーを作る活動を家庭で楽しみ、翌登園日には、コックさんに家から持参した自分の作ったキャンデーを食べさせたり、新しいキャンデーを作って遊んだりした。(図16, 17) また、ある日の絵本の読み聞かせでは、絵本<sup>4)</sup>のイメージで保育者が頭<sup>つ</sup>に角を着けていたのに気付いた子どもが翌日、角<sup>つ</sup>を着けて登園した。その後他の子も思い思いに角<sup>つ</sup>を作って遊ぶなど(図18, 19)、自分なりに心が動き表現して遊ぶ経験が、園生活への不安を無くし登園を楽しみにする姿や、園でのびのびと過ごす姿につながっていった。



図16 紙芝居(左)と配信画像(右)



図17 キャンディーを食べさせて遊ぶ

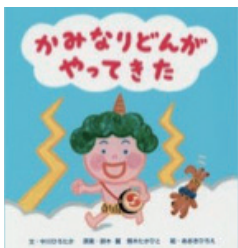


図18 絵本(左)と配信画像(右)



図19 角をつけて遊ぶ

## 2. 2. 2. 保育再開後の造形活動

感染対策に留意した保育活動には様々な制限があったが、子ども達の活動を単に限定するのではなく、活動の持ち方を工夫し本来経験するねらいや内容を可能な限り経験できるようにすることに務めた。園での造形活動には、教師発信の意図的な経験である活動だけでなく、毎日の遊びの中でイメージしたものを「作ったり、書いたり」して表現することや、作ったり描いたりしてできたものを用いて遊ぶことなどがある。意図的な活動では、密になることを避ける、用具の消毒などがあったが、幼稚園の生活の中でしか経験できない友達と一緒にする、あるいは一緒に経験をすることを保証していった。また、そこでの表現方法や素材・用具の経験が、各々の興味あるものに自分なりに取り組み遊ぶ中で生かされていった。保育再開直後はまだ緊張も続く中であったので、子どもの心の安定を第一に園生活を進めていった。

### 実践④ 心の解放～フィンガーペインティング～

7月からは分散ではなく通常の週5日間の登園となり、4歳児の子ども達も園生活に慣れ、ようやく安心して自分の思いを表し遊ぶようになった。感染予防の観点から今年度は個人持ちになった粘土は、分散登園時から園と家庭との両方で繰り返し親しむ機会を作り、冷たい粘土の硬さや柔らかくなってきた粘土の感触、つまむ、丸める、伸ばすなど様々な指先を使う経験にもなった。前記のコックさんのイメージから「お団子屋さん」「なんでも怪獣」「パフェ」(図20～22)などイメージを変えながら繰り返し親しんでいた。水にふれるのが心地よい季節になり、シャボン玉や色水作り(図23, 24), 砂場での遊びが盛んになった。まだ手を汚すのに抵抗を感じる子もいたため、綺麗な色が混ざっていく楽しさを味わい、全身を使って開放感を味わえるようにフィンガーペイントを繰り返しコーナーで展開して行った。(図25) これらは昨年度の研究で課題になっていた「感覚」についての経験にもなった。



図20 粘土遊び



図21 お団子屋さん



図22 パフェ屋さん



図23 ハンカチ屋さん(染紙)



図24 シャボン玉「くっついた！」



図25 フィンガーペイント



### 2. 2. 3. コロナ禍の竹早祭

竹早祭は、竹早地区の幼稚園、小学校で毎年11月に行われている行事である。文化祭的な意味合いの行事で、幼稚園では「表現」に視点を当て、日常の保育の中で作ったり描いたりして表現しているものの展示や、歌ったり楽器を用いたりして音楽的な表現を楽しんでいることを披露する機会として教育計画の中に位置づけている。今年度は、感染予防対策として密になることを避けるために、参観が伴う行事の実施が難しく、園舎でもこの行事の実施の可否を検討した。子ども達の生活にはこの「表現を楽しむ」ということは、コロナ禍いかに関わらず展開されており、むしろ、「表現」を通し、気持ちを開放したり、友達と思いを共有したりと園生活に必要な活動であった。そこで、『わくわくワンダーランド』というタイトルで、園舎の様々な空間に子ども達の作品を飾り、3日間に分けて各日20組ずつの親子で園内を回って子ども達に造形活動の一端に触れてもらうという形で開催した。今年度はまだ保育参観が実施されていないため、保護者も作品を通して園の生活の様子を感じ取ってもらう機会になった。

#### 実践⑤ 4歳児はな組「ドングリ坂のドングリ」

幼稚園の園庭には、大きなシラカシの木があり、毎年たくさんのドングリが実り子ども達の生活を豊かにしてくれる。2学期が始まり、ようやく生活が落ち着いてきた10月、4歳児の子ども達は毎朝、シラカシの木の下でのドングリ拾いが楽しみになっていった。一面に落ちていたドングリの上を歩く様子や、拾ったドングリをご馳走作りに使ったり、斜面を転がして遊んだりする様子（図26）から、歌「ドングリ坂のドングリ」<sup>5)</sup>を歌の教材として選んだ。自分たちの思いと歌詞の世界観がつながり、ドングリを拾いながら口ずさんだり、友達が集まると自然と歌い出したりなどしていた。担任教員は、ドングリが転がる様子を楽しむ姿から造形活動を計画した。（図27、29、30）また、園庭の木々の紅葉に触れ秋の自然に親しむ中で広がるイメージから、ドングリケーキ作り（図31）など毎日の園生活中でイメージを広げたり深めたりと様々な活動を展開していった。子ども達の製作物は自分たちが毎日上がり下がりしている階段の壁を「ドングリ坂」（図28）に見立て飾った。竹早祭の親子での見学では、ドングリケーキは、添えたフォークで保護者が食べる仕草をすると「チョコ味だよ、美味しいでしょ」と嬉しそうにしていた。（文責：神山雅美）



図26 ドングリ転がし



図27 ドングリちゃん



図28 階段の壁面に飾る



図29 絵の具遊び



図30 紅葉に見立てて



図31 ドングリケーキ



## 実践⑥ 5歳児つき組「あおいそらをえがこう」

5歳児は、友達との協同性を発揮しながら遊びや生活を進めていく時期である。竹早祭の取り組みでも、個々の取り組みだけでなく、友達と一体感を味わえる活動を計画した。青い空の下で、大きな紙にローラーを使って絵具で空を描いた。みんなの好きな「あおいそらにえをかこう」<sup>6)</sup>の歌を口ずさみながら、仲間と一緒に描くという経験も楽しかったようだ。大きな紙を目の前に、ワクワクしながらも初めは戸惑っていた子ども達も次第にダイナミックになっていった。「洋服が汚れちゃう」と心配していた子どもも、いつの間にか全身を使ってローラーを転がしていた。(図32)「スケートみたい」と言って絵具の上を滑るなど、道具の面白さだけではなく、絵具の感触の気持ちよさも味わいながら、空を広げていった。竹早祭では、背景の本物の青空との一体感を感じられるように、園舎2階のテラスのフェンスに飾った。(図33)

(文責：阿部かほり)



図32 ローラーを使って全身で描く



図33 2階テラスが青い空に

## 実践⑦ 保護者も参加「みんなで作ろう ワンダーツリー」

今年度は保育参加や保育参観の機会がもてていない。この竹早祭の機会に、子どもと保護者が一緒に幼稚園で活動するような場が少しでももてたらと考え、親子で取り組む活動を企画した。大きな模造紙に描かれた木の幹に木の葉をスタンプしていくという活動である。1日20組の親子がスタンプするので、葉は20枚以上になる。みんなで作る作品となった。

イチヨウ、桜、ハナミズキ・・・この季節、竹早の敷地内にはいろいろな種類の葉が落ちている。登園してきた子どもの手には、色とりどり、形も大きさも様々な葉っぱがあった。どれにしようかと葉を眺めたり親子で会話をするきっかけになったりもしていたようだ。その「お気に入りの一枚」にローラーで絵具を付け、大きな紙にスタンプする。上からバレンでこすると葉脈が浮かび上がってくる。紙から葉をはがすと「うわ〜」と子どもから声が上がった。一枚目は、べったりと絵具がついてしまい、葉脈が見えなくても、同じ葉を使ってもう一度スタンプすると、葉脈が浮かび上がった。保護者たちも「こんなにきれいに模様が出るんですね」と嬉しそうな笑顔だった。(図34, 35)身近な素材を使って表現する楽しさ、他の親子との合同の作品が出来上がる面白さを感じられただろう。(文責：八木亜弥子)



図34 親子でスタンプ



図35 三本のワンダーツリー



図36 竹早祭の入口

#### 2. 2. 4. コロナ禍の園生活の中でも「作ったり、描いたりしながら」遊ぶ子ども達

その後も感染症対策をしながらではあるが、子ども達は毎日幼稚園で過ごす中で今日楽しかったことをまた明日しようと思ったり生活が連続していった。絵本や身近な環境にふれる中でイメージを豊かにし、自分なりに身近な材料で試行錯誤しながら作ったり描いたりを楽しみ、出来たものを使って遊ぶことも楽しんでいる。作ったものがきっかけになり友達とつながったり、友達と一緒に作ることで遊びが深まったりしていている。(図37～39)



図37 私のお人形 (4歳児)



図38 人形のお家作り (4歳児)



図39 お店屋さん (5歳児)

### 3. リモートでの大学と幼稚園の共同

研究二年次は、コロナ禍で大学も幼稚園も共に休学・休園で始まったため、それぞれの教育活動が通常に戻った後、共同の実践は始めることを年度当初確認した。神山は、教育大学系美術学会などにリモートで参加し情報収集を行った。前述の竹早祭の取り組みでは、大学の笠原・清野が来園し実践に対し、専門的な視点から画材や取り組み方などについてアドバイスをした。更に「ワンダーランド」のゲート作成を担当し、デザインや材料選定などを提案した。(図36) この時期もまだ、人の行き来には細心の注意を払っていたため、実際に大学の教員や学生が来園してのワークショップのような実践は年度末に行う可能性を探って行くことを確認した。

打ち合わせや情報の共有では Zoom や Teams などのオンラインツールを活用している。大学では Zoom を活用しての演習を行っており、教材の送付や実際の講義での作品の共有の仕方などを参考にしながら幼稚園でのオンラインによる活動の可能性も検討している。現5歳児学年は、昨年度園舎長であった清野とはつながりもあることから、オンラインからの指導でも、昨年度のように造形活動を通して二年間の園生活を振り返りながら思い出になる取り組みができるのではないかと実践の可能性を検討している。現段階で検討されている活動は、担任教員からは、竹早祭の時に取り組んだ「あおいそらをえがこう」の続きの取り組みで、青い空をローラーで描いたところでひと段落しているものに自分の好きなものや幼稚園での思い出を描いて、歌詞の通り「あおいそらに」絵を描くという活動があげられている。これは、卒園式の会場を飾るものとして想定している活動である。大学教員との共同での提案としては、例えば昨年度の園舎長から届くビデオメッセージや材料をきっかけに製作を作り、その作ったものを家庭に持ち帰り、各家庭で撮影した写真を一連の動画に整えるといった活動がある。具体的には、一年間胸につけているバッチに顔と手足をつけて人形に仕立て、その人形の映像がつながっていく、というもので、思い出になる物を生かしていくこと、それにどう気持ちを込めるか、更に造形的な視点でどんなことが出来るかなど検討段階である。

また4歳児では、担任教員は年度当初よりこの一年間を振り返る活動として「おはながさくよ」をテーマにした活動を年度末に計画していた。不安の中入園をしてきた子ども達に対し、コロナ禍を親子で乗り越え、自分たちの進級を迎える春に期待をもてるように一年間の保育活動の中での様々な活動を通し育むことを大切にしてきた。卒園する5歳児を祝う気持ちと4月に新しい4歳児の友達と迎える喜びを、園内に飾る花を作るという活動で表すことが3月に予定されている。(文責：神山雅美)

## 4. ここまでの取り組みの振り返り

### 4. 1. 大学教員からの振り返り

二年目の取り組みはコロナ禍の影響で思いも寄らないものとなり、当初の計画にある「生活に根ざして展開する探究的な保育実践と造形活動の統合化」は「新型コロナウイルス感染症流行下の生活」という現実を抜きには考えられないものとなった。昨年のようにはできなくなってしまった様々な体験も多々あることは確かである。大学生ならばオンランで代替することもある程度できる場合もあるが、直接的な体験やかかわり合いが重要な幼児期ではそうはいかないものも多い。ここに示された数々の実践はこうした状況の中で可能な限り表現の機会を保障しようと工夫を凝らした取り組みの例である。家庭と幼稚園でできることをつなげ、距離を感じさせない保育と家庭支援の取り組みを開発したり、少しずつ距離（ディスタンス）さえもアイデアに取り入れるような活動も検討されているなど、この状況下での幼稚園での取り組みの記録がまずは重要である。

また、大学教員と学生が幼稚園で活動できる機会を確保することにはやはり難しさがあるが、前述のようなりモートでのミーティングや情報交流、アドバイスなど、こうした状況下だからこそできる支援や連携についても検討していく必要がある。普段であれば大学からの移動の時間の都合で多くの学生が幼稚園に関わるのが難しいこともあるが、リモートで参加できる共同の実践交流などは学生も参加できる取り組みの一つであろう。そうした試みは、コロナ収束後のための試行的な意味合いも大きい。長時間の作り込んだ内容での発表や情報交流ではなくても、まずは幼稚園での取り組みを発信する連携や支援からでもできることを具体化していければと考える。（文責：笠原広一）

### 4. 2. 幼稚園教員からの振り返り

今年度は休園や分散登園後も教育活動に様々な制約があり、安全な生活を守りながら、どう子ども達の学びを保証していくかが保育活動を計画していく上で重要であった。4月からの実践を振り返ると、保育活動の中の「表現」、特に造形に関わる活動はどのような状況下でも子ども達の心踊る楽しい活動の中心にあることが分かった。また実際に郵送で教材を送るのでも扱いやすく、家庭でもできる遊びを提案しやすいよさもあった。今年度の取り組みは新型コロナウイルス感染症の流行下ではあるが、通常の保育下で大事にしていることを込めて実践を進めることが出来た。このことは、その後の園生活で子ども達が身近な環境に働き掛け、出来事を紡ぎながら遊びを進める姿や、身近な用具を用いて様々な素材や材料を扱い、イメージを実現していくことを楽しむ姿に現れていた。しかし、特に5歳児学年では協同性を育む実践に制約があり、難しさもあった。

大学との連携は、年末からの再度の緊急事態宣言発令により実施の可能性が薄れたが、そのことで、通常の幼稚園での教育活動では考えることのない新たな実施方法を検討するきっかけとなったと考える。特に、今年度末に予定されている4歳児学年の実践は、1年次の研究で明らかになった「生活に根ざして展開する」造形活動につながる活動になると考えられる。

## 5. 今後の課題と可能性

今年度の当初の目的であった「探究的な保育実践と造形活動の統合化」について、コロナ禍の生活ではあるが実践レベルでは実現した。しかし、理論的な考察は十分とは言えない。今年度の実践は、大学と幼稚園の共同に新たな示唆を与えるものである。この状況は当面続くものと思われるので、検証をしながら今後様々な可能性を実現し、大学と幼稚園教員が共同で幼児や学生の学びを保証する可能性を探る。（文責：神山雅美）

### 注

1) 2) 保育実践と統合的に編み上げられる造形活動の実践理論の構築—生活に根ざして展開する造形的な技能獲得の年間計画化—（1年次）

- 3) 「ごきげんのわるいコックさん」 童心社 脚本／絵 まついのりこ
- 4) 「かみなりどんがやってきた」 世界文化社 文 中川ひろたか 原案 鈴木翼 熊木たかひと 絵 あおきひろえ
- 5) 「ドンダ坂のドンダ」 詞 新沢としひこ 曲 中川ひろたか
- 6) 「あおいそらにえをかこう」 詞 一樹和美 曲 上柴はじめ